勇者未満、恥辱旅

——もう世界に勇者はいない——

END

オルテガの消息が途絶えてから、長い年月が流れた。
魔王軍による世界の侵食は、徐々に徐々に進んでいる。
だが、魔王の城から遠く離れたここアリアハンでは、その実感は薄かった。

少女勇者は穏やかな塀の外に目をやりながら
ひのきの棒を、やあッ！、と振った。
スライムが目の端に止まる。
ゆらゆらと身体を揺らしながら、挑発するかのようにこちらを見ている。
嘲笑っているような何も考えていないようなスライムの様子に、
勇者は眉を潜めた。
（あんなモノが本当に強いの？）

プルルン

シュッ

旅立ちの日まで外に出てはいけない、と母にはきつく止められている。
でもちょっとだけ、ちょっと試すだけ。
魔物というものがどれほど強いのか、自分がどれだけ強くなったのか。
勇者は周りに誰もいないことを確認して、たっと外へ駆け出した。

「ほら！、こっちこっち！」
街を出たことがばれないようスライムを煽りながら、木立を縫って奥へと入り込んでいく。
この辺りでいいかな、と勇者が立ち止まった瞬間、スライムは勇者に襲い掛かった。
「うわっ！」
ぷよぷよと跳ね回り、勇者の足をすくい倒す。
勇者もすかさず攻撃したが、ひのきの棒の攻撃力では、たかが知れたものだった。
「あれ？、こいつ弱っちいや、おーい、みんなー」
「えっ!?」
スライムは仲間を呼んだ。
「なに？、なになに？」
たまたま通り掛かったスライムの群れが、仲間に加わる。
勇者は、あっという間に魔物に取り囲まれた。
グッ
プル
プル
プル
プル
プルン

「いっつもいっつもボクらのこと追い回して、見てろー、今日はごめんなさいって言うまで懲らしめてやる」
「賛成ー、で、どうやって懲らしめる？」
「そうだ、ボク、噂で聞いたんだけど、人間のメスは足の間にある穴が弱点なんだって、そこを責められると、すぐ泣いて謝っちゃうって聞いたよ」
「へー、でもこれオスだろ？、胸ぺったんこだもん」
「そんなの、この邪魔な布きれを引っぺがせば分かるよ、そら！」
「きゃっ！」
言うが早いか、スライムはパンティーと呼ぶには幼い形状のそれを引き剥がした。
露になった勇者の下半身をスライム達が、まじまじと見上げる。
「開いてる開いてる、穴、一つじゃないけど」
「おー、じゃあこれメスなんだ、どうする？、この穴、どう責める？」
「いいから両方責めちゃえ！」
「よーし、責めて責めて責めまくるぞー、おーっ！」
「な……っ!?」

スライムは、にゅうっと伸ばした頭のツノを、ぷにゅりと両穴に突き立ててきた。
ひやりとした感触に勇者が、ひゃっ!、と身をすくませる。
戦う事しか頭になかった勇者にとって、それは想像だにしない攻撃だった。
スライムのツノが入り込んでいるだけなので、痛み自体はそれほどでもない。
だが、柔らかな肉をこじ開けて潜り込んできた異物が、ねじくるように
処女口を刺激した瞬間、勇者の背に言い様のない震えが走った。
「くうぅっ!」
ビクン、と尻に力が入って中のスライムを締めつける。
勢い抜け出そうになったスライムは、
なにくそ、とばかりにツノを突き刺した。
「うあっ、ああうっ!」
「追い出そうたってそうはいかないよ!」
「ボクだって、
泣くまで出てやらないからね!」
そこが人間のメスの弱点だと信じて疑わないスライム達の、
無邪気だけれど執拗な攻撃。
ある意味間違っていないのだが、
スライムはその行為が性的快感と直結しているとは思ってもいない。

ぬちゃぬちゃとした湿り気のある音が辺りに響き始めた。
「やめっ、くぅ……っ、うん！」
肌が汗ばみ、内股を擦りあわせたくなるような
むずむずとした感覚が、徐々に沸き起こってくる。
勇者は初めて受ける性器への刺激に、喘ぎを漏らし始めた。
「あ、ほら、泣いてるみたいだよ、あんあん、言い出した」
「ホントだ、それにこの中も、じゅくじゅくになってきた、
ねえ、人間って下の穴からも泣くんだね」
「ボクらの攻撃が効いてるんだ！、
よーし、面白いからもっと泣かせてやろう！」
ぬっちゅ
ぬっちゅ
ぬっぷ
ぬっぷ
「はあっ、だ……、ぇっ！、う……、んんぅっ」
魔物との初めての戦闘の筈だった。
それが、何故こんな……！
（このままではいけない！）
ぶしゅ
プル
プル
体力を失う前にスライム達を振り払い、街へと走るのだ。
今はまだ勝てなくても、いずれ時が来れば、この日の屈辱を晴らせる日が来る。
だが、その時だった。
勇者に影が差し、見た事もない巨大な魔物が姿を見せた。

「メスの出す匂いに誘われてみれば、これは、スライムども、楽しそうなことをやってるな」
ニタニタといやらしく笑いながら近付いてくる。
明らかな強敵の出現に、勇者の身に真の緊張が走った。
不意に、魔物は何かに気付いたように顎に手を当てた。
「んー？、その身なり、年格好……、もしかしてお前が勇者……」
言い当てられた事に驚いて、身を強張らせる。
勇者の迂闊な反応に、魔物は確信を得て笑いだした。
「そうか、お前が！、お前みたいな
メスチビが人間どもの勇者！
サマンオサでの任の前に、バラモス様に
偵察するよう言われてここまで来たが、
こいつは、とんだお笑い草だ！」
「く……っ！」
勇者は、黙れ！、と叫んだが、スライムにさえ勝てない有り様では、
まさにお笑い草としか言い様がない。
だが、こんな有り様でも臆する事のない勇者の矜持に、魔物は感心した。
「未熟でもさすがは勇者か！、なるほど、その気の強さ気に入った！
お前はこのオレ様、ボストロールのメス奴隷にしてやろう！」

キッ
ぬっちゅ
ぬっぷ
ぬっぷ
プル

ボストロールはスライム達を蹴散らすと、
勇者から武器を奪い、邪魔だとばかりに服を引き裂いた。
勇者が驚いて、ひっ!、と悲鳴を上げる。
堅さの感じられる膨らみかけの胸が、ボストロールの目に晒される。
そして、その下に続くなめらかな下腹。
ボストロールの視界は
上から下へと舐め回すように下りてから、
薄桃色に色付く股間で止まった。
「しかし、小さい、小さいな、これじゃあ、
オレ様のモノを挿れたら、すーぐぶっ壊れちまう」
「ああっ!」
ボストロールは勇者を膝に乗せると、
既に屹立している自らの肉棒を跨ぐように座らせた。
大きな手で勇者の太股を掴み、むにゅり、と肉棒を挟み込ませる。
脈打つ肉棒の熱が、ダイレクトに勇者の処女性器に伝わる。
それは勇者の腕よりも遥かに太く、腹を突き破りそうなほどに長かった。
グッ

「せっかくのオモチャ、即、壊しちまったら元も子もないからな、今日のところは、これで勘弁してやる」
ボストロールは勇者の未成熟な性器で、自らの肉棒を擦り始めた。
既に湿り気を帯びていた勇者の秘唇が、ボストロールの肉棒を濡らしていく。

ふッ

ピクッ
ピクッ

勇者は逃げ出そうと必死に身を捩ったが、がっちりと掴んだボストロールの腕は強く、びくともしなかった。
「く……うぅっ！」
「どうだ、お前もマンコが擦れて気持ちがいいだろう、んー？」
「だ……誰……が……、んんっ！」
「勇者と言っても、お前はメスだ、メスはな、こうしてオレ達オスに、マンコをいじくられるのが大好きなんだ、ほれ、ほれ！」
しゅ、しゅ、と素股を肉棒で擦られ、控えめだった勇者のクリトリスが、ぷっくりと勃ち上がっていく。
首をもたげたクリトリスへの刺激に、更に快感が増していく。
抵抗の意志とは裏腹に、勇者の処女性器から新たな蜜が零れだした。

しゅっ
しゅっ

「なんだあ、挿れてもないのに、オレ様のチンポを汁まみれにしようってか？
こいつは、とんだ淫乱勇者だ」
「バ……、バカにする……な……っ、ああっ！」
「何を言おうが、マンコがこうヒクついてちゃなあ、あん？」

ぞく
ぞくぞく

勇者の秘唇のヒクつきは、
ボストロールの肉棒に生々しく伝わっている。
勇者は勇者でありながら、あまりにも性的に感じやすかった。
生きたオナニー道具として扱われているのに、
性器に受けた刺激の全てを愛撫と感じてしまう程に！

しゅっ
しゅっ
しゅっ

「うあ……あ……、く……っ、ぅん……！」
（なんで……、こんなのが気持ちいい……!?、いやだ……！）
修行修行で性的知識の乏しい勇者にも、
今自分がされている行為の意味くらいは理解出来る。
そして理解しているからこそ、勇者は感じている事が恥ずかしく、信じられなかった。
「さーて、そろそろ我慢も限界だが、記念すべき勇者様への最初の射精だ、
こればかりは、ちゃーんと腹ん中に出してやらないとな」

ボストロールはせり上がる射精感を押さえて、素早く、勇者の膣口に爆発寸前の亀頭を押し付けた。
食い込み気味に宛てがわれた肉棒に、挿れられる！、と勇者の身が強張っていく。
「ダ……、ダメだ……っ！」
だが、勇者の制止に対して、ボストロールは挿入無しで射精を開始した。
「うあああぁぁぁあぁっ!?」
膣内に入り込んできたのが精液だけとはいえ、その勢いは凄まじかった。
精液は間欠泉のように激しく勇者の膣内を駆け登り、一気に子宮口へと到達する。
「熱っ、あっ、熱うううううっ！」
「この膣内に挿れて出す日が愉しみだ、ほれ、出すぞ！、まだまだ出すぞ！」
「あっ、あああっ、あああぁ――っ！」

バシャバシャと子宮口に浴びせられる熱い濁汁が、勇者を悶えさせる。
破瓜の苦痛を伴わない処女性器への責めが、勇者の感覚をおかしくさせる。
勇者は我知らず、その身に絶頂へと続く快感を感じ、無意識にそれを追った。

「ふあ……、あ……あ!?」
最後の一滴が膣内へと放たれ、逆流した精液が膣口からドボドボと溢れ出す。
同時に、勇者は身の内に沸き起こった甘狂おしい何かに、ふるりと身を震わせた。
(今の……なんだ!?、今の……)

ぷるぷる

それは短いが、紛う事無き絶頂だった。
ボストロールは勇者の処女を、精液で以て犯したのだ。
「まずは、お前のこのちっちゃいマンコを仕込まないとな、
オレ様のチンポを根元までくわえ込めるように」
怒りとショックでぶるぶると身を震わせる勇者を見下ろし、
ボストロールはガハガハと笑った。

ひくっ

ドプッドプッドプッ

これからどうなるのか――、思いもしなかった勇者の旅が、今、始まる。

旅人は土手を見上げて、目を見開いた。
その目に飛び込んできた光景、それは、恐ろしげな魔物が裸同然の少女を
囚人のように縄でくくって引き連れている、信じがたいものだった。
しかも、少女は背に張り付いたホイミスライムによって、
その露な股間を犯されている。
ぷるぷると震える内股や桃色に染まった少女の
秘唇が、旅人の目を釘付けにした。
ぬちゅ
くちゅ
はッ
はッ
「噂には聞いていたが、この目でお目にかかれるとはねぇ」
突然、商人が話し掛けてきて、旅人は驚いた。
「う、噂？、どんなだ？」
「ああ、どうやらここ一週間くらい前からだそうだが、ああして
魔物に犯されながら連れ回されてる娘がいるって耳にしてな」
「それはまた、どうして……」
「さあな、理由までは……、魔物に聞く勇気もないしな」
それもそうだ、どれほど哀れな娘がいようと、あれほど巨大な魔物がそばにいては、
助けるどころか近付くことさえ出来ないだろう。
出来るのはただ遠巻きに見つめる事だけ、というより目を離す事が出来ないだけか。
実際、商人と旅人の二人ともが、会話をしながらも少女の痴態を見続けていた。

少女は歩いては止まり、歩いては止まりを繰り返しながら、必死に歩を進めている。
だが、少女が感じているのが苦痛ではなく快感なのは、少女の愛液で
ぬらぬらと濡れ光るホイミスライムの触手で明らかだった。
だが、快感も過ぎれば苦痛だ。
「ふ……くうぅぅんっ！」
少女はグイッと強く押し込まれた触手に、
もう耐えきれない、とばかりに足を止めた。

ぬちゃちゃ

キッ

前を行く魔物が、ニタニタと振り返る。
「おら、さっさと歩け！、それとも何か、
また観客らに自分のイくところを見て貰おうってか？」
「違……！」
魔物の嘲りに、少女はキッと瞳を細めた。
あれほどの目に合いながらも、魔物に逆らう少女の気の強さに驚かされる。
少女は沸き起こる快感を振り払うように首を左右に振ると、
改めて魔物を睨み付けた。
魔物が、ニタリと笑う。
「どうやら勇者様は触手一本程度、屁でもないそうだ。
おい！、もう一本突っ込んで滅茶苦茶に掻き回してやれ！」
「はーい！」
ホイミスライムは嬉々として触手を振りかざした。

それほどこなれているとも思えない少女の秘裂に、二本目の触手が強引に潜り込んでいく。挿れやすいようにとホイミスライムが少女の秘裂を他の触手で押し開いた為、二本の触手の形に歪め広げられていく少女の膣口の様子は、あまりにも露だった。

男達の股間が、否応なく反応する。

「あ……あ……あ……っ」

程なく触手は少女の腹に収められた。

圧迫感からか、少女が苦しげに息を詰める。

少女の膣内はよほど気持ちがいいのだろう、よく見れば、普段、何を考えているか分からないホイミスライムの目がうっとりしていた。

一拍置いて、ホイミスライムは魔物に言われた通りの責め苦を開始した。

ヌッチュ
ヌッチュ

ビク ビク

「あふうううううう……っ!?」

一方を膣奥まで突き入れたかと思うと、
もう一方を抜けそうなほど引き抜き、またえぐり込む。
かと思うと、もうそれ以上入らないというところまで
二本同時に捩じ込み、ぐにぐにと子宮口を攻め立てる。
不規則な責めに翻弄されているのか、
前傾姿勢の少女の身体が、触手の動きに合わせて
生々しく前後に揺れた。

「うはっ、あはっ、はっ、あっ、ああ……っ!」

どう見ても乱暴にしか見えない行為なのに、
少女の苦鳴には徐々に、だが確実に喘ぎが混じり始めた。

はっ
はあ

「漸く二本挿れても感じるようになったか、ん?、どうだ?、イきそうか?
イくならイくって言えよ」
少女が小刻みに身を震わせながら、ぶるぶると首を振る。
魔物の言う通り絶頂寸前なのだろう、
唇を噛んでそれに耐える少女の姿に、
まだかまだかと男達がごくりと喉を鳴らす。
ぬっちゅ
ぬっちゅ
ぬっちゅ
男達はそれぞれの心の中で、
触手の動きに合わせて少女を犯していた。
そして、少女もきっと、その男達の視線を感じている。
それを裏付けるように、一瞬だけ少女と視線が合った。
魔物の触手に感じている事に恥じ入ってか、すぐに目を背けたが、
間違いない、少女は今や、二人と二匹に犯されているも同然だった。
「う……う……、うぅ……くっ!」
少女はもう喘ぎさえ漏らすまいと、
不自然に息を切らせながら声を噛み続けている。
「こんなもん大した事ないってか?、じゃあ、しゃきしゃき歩いてみせろ、ほれ!」

「うあっ!?、あああああああああああっ!」
ヌジュ
ぷちゅ
ぷちゅ
トロー
ぷるぷる
魔物が縄をグイッと引っ張った瞬間、
少女は辺りに響き渡る派手な嬌声を上げて、愛液を溢れさせた。
一歩足を踏みださせられたことで、膣内を犯す触手の角度が変わったのか、
予想外の快感が少女の膣に襲い掛かったのだ。
少女がとうとう絶頂に達してしまったことは、
この場にいる誰の目にも明らかだった。
「ああ……あっ、あ……っ」
人に見られながらイッた羞恥からか、少女だけが、
今のは違う、とでもいうように首を振り続けている。
だが、一度達した身体は、
そう簡単に少女を楽にはさせない。
ホイミスライムは畳み掛けるように触手を捩じり込んだ。
「ああああああああああああああっ!」
ビクッ
はッ
ひッ
ビクビクー

喘ぎを漏らし続ける少女に構わず、魔物は笑いながら、尚も引き摺るようにして少女を歩かせようとする。

「ほれ、グズグズするな、行くぞ！」

「うわっ、待……、待……っ、あああ……っ！」

そして、ホイミスライムの責めも当然のように続いている。

「くうっ、う……ううぅんっ！」

少女はなんども膝をついては立たされ、生まれたての子鹿のような足取りで強引に歩かされた。

商人の聞いた噂が本当なら、少女はああしてい一週間以上も犯されながら歩かされていることになる。

目的地があっての旅か、それともただの魔物の遊びか。

その間の少女を想像して、

少女の絶頂とともにイッたばかりの男達の股間がまた熱を持つ。

男達は少女の姿が見えなくなった後も、遠くから聞こえてくる断続的な嬌声が完全に過ぎ去るまで、その場から一歩も離れることが出来なかった。

勇者は秘裂をボストロールに舐め回されながら、ボストロールの剛直を懸命に頬張っていた。

「むぅ……うんっ」

あまりの大きさに亀頭の途中までしか頬張れていないが、唇を使って必死にそれを扱く。

ボストロールは頑張っている褒美とばかりに、大きな舌で勇者のクリトリスをベロベロと転がした。

れろん

れろ

「ふうううんっ！」

快感で、ヒクン、ヒクン、と勇者の膣口が開いたり閉じたりを繰り返す。

勇者の秘唇は、ボストロールの唾液と自らの愛液で恥ずかしいほどにべちょべちょだった。

そして、ボストロールの肉棒もまた、勇者の唾液と自らの我慢汁でべちょべちょに濡れている。

チュルッ

チュッ

チュプ

「どうだ、うまいか？」
「ふっ、うん、うんっ」
ボストロールの問いに、勇者は鈴口から流れ出す我慢汁を美味しそうに舐めて答えた。
更に、もっと頂戴、とばかりに舌先を鈴口に差し込んでくる。
勇者の無邪気な奉仕に、ボストロールの肉棒は今にもはち切れんばかりに血管を浮き立たせた。
射精が近いことを知ってか知らずか、勇者が先端をちゅうと強く吸い上げてくる。
これには、さすがのボストロールも堪らなかった。
「うお！、出るぞ、出るぞ！」
ギュギュー

その時だった、うっとりしていた勇者の目が突如として見開かれる。
「んっ!?、んん――っ!?、んむうう――っ!」
勇者は我に返ったように暴れ始めたが、頭を下にした不自然な体勢では尻を振ることしか出来ない。
くわえ込まされていた亀頭だけでも口から離そうとした瞬間、精液が発射された。
「うぶうううぅぅぅ――っ!?」
魔物の濃い精液が、勇者の喉に直撃する。
口内いっぱいに吐き出されていく精液のあまりの量に、勇者は否が応でもそれを飲み下さざるをえなかった。
「んぐっ、おぶっ、ん……んっ!」
精液の海で溺れないよう、勇者の喉が何度も上下する。
勇者の口端からは、蛇口の先を押さえた時のように精液が吹き出していた。

「う……うぇ……え……っ」
漸く射精が止まった時には、勇者の頭も顔も白濁汁でべっとりと汚れていた。
(何故!?、どうしてこんな!?)
勇者の頭の中は、ショックと疑問でいっぱいだった。
覚えているのは、日課となってしまったホイミスライムの触手を
夕刻に抜いてもらってホッとしたこと。
その後、確か、顔ばかり目立つ魔物が近付いてきて……、
「申し訳ありません、ボストロール様」
聞こえてきた声に勇者が目を向けると、顔ばかりが目立つ魔物、
ドルイドが杖を手に申し訳なさそうに立っていた。
「肝心のところで術が解けてしまったようで……」

う…

どろー

「いや、これでいい、この方が面白い！」
ボストロールは満足げに笑い、続けて言った。
「だが、噛まれては堪らんからな、今の術をもう一度掛けろ、加減は分かるな」
「はい、勿論です、ボストロール様が射精する時には正気に戻るよう調整します」
「!?」
では、今もまだ口の中に残る苦く熱い汁を、また飲ませるつもりなのだ。
自分がされたこと、そして再びされることを知って、勇者は暴れだした。
身体だけでなく精神までも自由にされる屈辱に、我慢が出来ない。
だが、ドルイドは無情にも術を唱え始め、
ボストロールは勇者の秘所をねっとりと舌で嬲ってくる。
「うあ……あ……っ！、やめっ、や……っ！」
性器を愛撫される快感に悶え苦しみながら、勇者の頭は真っ白に染まっていった。

まだ足りない、もっと、もっと距離を取らなければ！
一心不乱に走る勇者の目に、浅いが清らかな泉が飛び込んできた。
汗まみれの勇者の喉がゴクリと鳴る。
勇者は一瞬だけ迷ってから、倒れ込みそうな勢いで泉に向かった。
何度も手ですくって泉の水を飲み、残骸と成り果てた衣類を取り去る。
冷えた清水は疲れた足に心地よく、勇者の心をホッとさせた。
だが、ゆっくりとはしていられない。
くちゅっ
勇者は手早く身体の汚れを落とすと、
一度だけ大きく息を吸い、意を決して自らの秘裂に指を挿れた。
「ふ……んん……っ」
魔物達には散々弄られたけれど、自分でそこを弄るのは初めてのことだ。
勇者の小さな手では到底膣奥まで届く筈もなかったが、勇者は一生懸命指を挿れた。
本来なら魔物を倒す筈のこの身体から、
忌まわしい魔物の残滓を全て掻き出してしまいたい一心からだった。

素股でも射精だけは膣口に宛てがって行うせいで、勇者の膣には今もまだ昨夜の精液が詰まっている。
くちゅくちゅとした音と共に、それがトロリと流れ出してきた。
「う……ううん……っ」
だが、昼はホイミスライムの触手による拡張と調教、夜はボストロールを悦ばせるオナニー道具として弄られ続けた勇者の性器は、性的意図を持たない自身の指にさえ過敏に反応してしまう。

「ふうう……！」
ともすれば更なる快感を求めて自ら指を蠢かしてしまいそうになる自分に気付いて、勇者は堪らず動きを止めた。
いや、駄目だ、こんなのんびりしてる場合じゃない。
とにかく、早くこの作業を終えてまた走り出さないと、漸く隙を見て奴から逃げ出せたのに、全てが無駄になってしまう！

勇者は歯を食いしばり、感じようとお構いなしに指を動かし始めた。
「んっ、んっ、んううぅ！」
膣内の精液が減っていくのに反比例して、快感は急速に高まっていく。
下腹が熱を持ち、絶頂寸前の膣口が、きゅうっと自身の指を締め付ける。

そこを無理に開かせて精液を掻き出す動きは、
最早、性感を得る為に膣口を擦っているも同然だった。
「どうしよう……、イき……そう……、イきそう……っ」
頭がふわふわとしてくる。
勇者はいつの間にか、掻き出す精液がなくなっていることにも気付かず、指を動かしていた。

「匂いを頼りに漸く見付けたと思ったら、マンコ広げてお楽しみの真っ最中か」
「！」
ビクリ、と勇者の指が止まった。
快感が堰き止められ、こめかみから嫌な汗が滴り落ちる。
勇者として倒すその日まで、もう二度と聞きたくなかった笑い声が、。
すぐそこまで迫ってくる。
ガサッ
「充分に拡張してからと思ったが、もうやめだ。
どうせ、オレ様の肉棒を挿れられて、
潰れずに済んだメスはいないんだからな」
「く……っ！」
勇者は一縷の望みを掛けて逃げ出した、――が、やはり容易く回り込まれてしまった！
ボストロールは勇者を捕らえると、挿入の為に大きく足を開かせた。
「こいつは逃げた仕置きだ、その小さなマンコで存分に味わえ！」
ギクッ

「いッ!?、ひぎゃあああああああああ――ッ!」
引き裂けるような悲鳴が、辺りに響き渡った。
限界にまで瞳を見開いた勇者の腹の中で、肉の凶器が勢い任せに侵攻していく。
ゴリゴリとカリで膣壁を擦りながら、勇者の膣道を魔物の男根でいっぱいにしていく。
それは、外から勇者の下腹を見ているだけでも分かるほどに痛々しく、強烈だった。
ガクン、と勇者の上半身が大きく揺れる。

!!

ズボオオオオオッ

ガクン

「はぐうううッ!」
子宮口へと到達した亀頭に、身体が揺さぶられたのだ。
だが、ボストロールはそこから更に、子宮口を突き上げてきた。
「おごおぉぉぉぉッ!」
内臓の位置が変わるほどの挿入、勇者の小さな胎内に、ありえない程の性器が詰め込まれる。
全てを受け入れた時、勇者は息も絶え絶えだった。

(も……ダメ……、裂ける……、裂ける……!)
だが、ボストロールが快楽を得る為に動き始めた次の瞬間、予想に反して勇者の口から上ったのは、悲鳴同然の嬌声だった。
「ひあああぁぁあああぁぁぁぁぁぁッ!?」
……ッ
膣壁をこれでもかと擦りながら抜け出ていく肉棒が勇者に信じがたい程の絶頂感をもたらし、快感のあまり溢れ出した愛液が肉棒の動きを助け、感じていた苦痛を更なる愉悦へと変容させていく。
「うッ、嘘ッ!?、嘘おぉぉぉ――ッ!」
ズズッ
ズズズッ

膣口で引っ掛かるカリの張り出しによる衝撃も、子宮口を押し上げる暴力的な突き上げも、全てが異常なほどに気持ちいい。ついさっきまで、息が止まりそうなほどの圧迫感を感じていたのに、何故――!?これこそが魔王を倒すべく生まれた女勇者の資質、容易く魔物に屈しない身体が、快楽を得ることで傷付くことを回避しているのだ。しかしそれは、勇者を絶頂地獄へとおとしめる諸刃の剣でしかなかった。

「んぎッ、いッ、いッ、いいいいいいいいッ！」

勇者の意志などお構いなしに、勇者の膣は、魔物の剛直に応えていく。

「おお？、オレのモノを受け入れて、これほど悦ぶメスに出会ったのは初めてだ！

それにこの、締め付けと吸い付くような膣の感触、堪らん、堪らんぞ！」

気をよくしたボストロールは、勇者を高速ピストンで突きまくった。

「おぐッ、あぐッ、うッ、ううんッ！」
ガッツン、ガッツン、と子宮口を突かれ、その度に勇者の背が跳ね上がる。
動きに合わせて発せられる喘ぎはボストロールを悦ばせ、更なる反応を引きだそうと、
突き上げを一層苛烈なものにしていく。
それでも、勇者の小さな身体は全てを受け入れ、感じてしまう。
「あひッ、ひッ、ひいいいいいッ！」

ひッ

ひぐ……ッ

それは最早、恐怖を感じるほどの快感だった。
（死ぬ！、死ぬ！、死ぬうううッ！）
昇りつめたまま下りられない、頭も目の前も真っ白に染まっていく。
勇者は恐怖と快感のあまり、我知らず涙を流し始めた。
勇者の胎内で、ボストロールの肉棒が一回り大きく膨らむ。
「出すぞ、出すぞ！、今度こそお前の子宮に、オレ様の子種をたっぷりと流し込んでやる！」

ずっぷ
ずっぷ
ずっぷ
ずっぷ
ずっぷ

「ほあああああぁぁぁぁぁぁぁぁぁ――ッ!?」
子宮口を焼く熱で、勇者に絶頂を越えた絶頂が襲い掛かった。
未熟だったはずの子宮がとろけるように疼きだし、
オスに犯されるメスとしての主張を始める。
大量に流し込まれてくる精液に、むせぶように熱を持つ。

おッ
ビクン
おおお…ッ
ビクン
ぶしゅうううッ

膣道が肉棒でいっぱいに塞がれているせいで、
精液はどんどん子宮内へと流し込まれた。
「念願の射精だからな、今日は精嚢がカラになるまで出しきってやる」
「おほッ、ほおッ、ほおぉおおぉうッ」
尋常でない量の精液が子宮内で渦を巻き、荒れ狂う。
勇者の涙は最早、随喜の涙に変わり、何も考えられないままによがり狂った。

(お腹……、気持ちいいっ、気持ちいい、気持ちいいい……っ)
ボストロールもまた、少女の小さな子宮に精液を注ぐ快感に酔いしれている。
勇者の下腹はとうとう妊娠中期同然にまで膨れ、受け止めきれなかった精液が
狭い隙間を通って膣口から溢れ出した。
そして、膣口から溢れ出す精液の熱が、また勇者を悦ばせる。
「うあぁぁぁ……、気持ひいい……ッ、いひ……よぉ……ッ」
だらしなく開いた口、トロンと快楽に濁った目、
揚げ句、抜かずに始められた二度目の性交に、ヒクヒクと膣壁を収縮させる。
そこには、魔王を倒すべく剣の修業をしていた勇者としての面影は、微塵もなかった。
あは…
は…
ピク
ピク
は…
ピク
どぷっ
どぷどぷ

魔物の精液を子宮で受け止めたせいか、勇者の身体は急速に変わろうとしていた。
少女らしく控えめだった胸が犯されるたび疼くように張り、
乳首も堅く尖り始める。
それをもっと大きくしてやろうと、ボストロールは吸引力のある魔物に、
勇者の乳を吸わせた。
「うあっ、あっ、そんな……、ひっぱる……なあぁぁ……っ」
何匹もの大王ガマが、勇者を取り囲む。
大王ガマはまだ堅さの残る勇者の乳房や乳首を粘性のある舌で巻き込み、
左右から痛いほどに引っ張っていた。
「痛……いいい……っ」
このまま胸を引きちぎられるのではないかと錯覚するほどの激しい痛み。
だが、限界ギリギリのところで大王ガマはグフッと鳴くと、引く力を緩めた。

「ふあ……ぁ……っ」
苦痛から解放され、痛みが、じんとした痺れに変わる。
同時に乳首を舌で巻き締めながらクニュクニュと揉みしだくと、
訪れた甘い快感に勇者はぷるりと身を震わせた。
そして、ある程度感じさせてから、また強く引っ張る。
「うあっ、あ……く……っ！」
何度も繰り返されるその行為に、勇者の心と身体が翻弄されていく。
今、自分が感じているのが痛みなのか快感なのか、それともその両方なのか、
訳が分からなかった。

ぺたぺたと肌を這う大王ガマの手足が、気持ちいい。
口内や肌を這う舌も、気持ちがいい。
魔物に与えられる刺激の全てが、気持ちよかった。
「だ……だめ……、感じちゃ……だめ……」
次こそ逃げ切って、勇者として魔王を倒すのだから。
そう、自分はまだ使命を忘れてはいない。
まだ、大丈夫――。
は…ッ
きりりっ
きゅっ
きゅっ
ねとお
れろん
ねちょおお
ぎゅううっ
「だ……!?、ふぇえぇぇ……っ!」
だが、言葉とは裏腹に、キリッ、とつねり気味に乳首をひねられて、
勇者はそれだけでイきそうだった。

「んっ、んんっ、んっ、か、感じても、負けてない、負けてない……っ」
自分でも薄々気付いている、感じてしまうことはもう止めようがないのだ。
特に夜、ボストロールの肉棒を受け入れている間の自分は、奴が嘲る通り、
よがることしか出来ない一匹のメスだった。
だからこそ、せめて胸を弄られただけで乱れる身体にはなりたくない！
これ以上、堕ちたくない！
でも、乳首弄られるの、気持ちいい……！
「く……ッうううん！」
必死に耐える勇者を嘲笑うように、大王ガマは一斉にゲロゲロと笑いだした。

勇者は旅の余興とばかり、海辺で出会った魔物に性具として貸し出された。
「オレは運がいい、前々から人間のメスの性器を試してみたいと思っていたんだ、さーて、しっかり開かせて……と」
「や、やめろ……！、離せ……！」
必死で否を唱える勇者に構わず、
大王イカが勇者の足を開脚気味に開かせていく。
肌に張り付くねっとりと冷えた触手の感触に、
勇者はその身を粟立たせた。
ボストロールに犯されまくっているとは思えないほど
艶やかな勇者の秘裂に、異様な形状の触手が迫る。
それは、普段は隠されている大王イカの生殖器だった。
蠢く瘤に覆われたイソギンチャクのようなそれが、勇者の股間に迫ってくる。
「い、いやだ……、いやだ……！」
あんなモノを挿れられたら、どうなってしまうのか。
多分、壊されはしない、壊されはしないが、それよりももっと――、

「ひいいいいいいいいいッ!?」
ずろろろろ!、と襞という襞を掻き鳴らしながら入り込んできた
大王イカの生殖器によって、勇者の危惧は現実の物となった。
子宮口まで侵攻した後に始められた全膣壁への一斉愛撫、
瘤や触手による強烈な刺激が、
勇者を一気に悦楽の高みへと上らせる。
「ひッ、ひいいいッ、ひいいいッ!」
勇者は堪らず、はしたないイき顔を晒して、
大王イカの生殖器を締め付けた。
「おお、おお、これはいい、堪らん気持ちよさだ、
いいぞ、もっとだ、もっと締めろ、もっと締めろ!」
「んひッ!?、んひいいいッ!」
ひッ
んひ…ッ
ひいいッ
ぶるるるるるる!
気をよくした大王イカが、子宮口を突き上げながら、胴部を更に激しく振動させる。
(ダメ……ッ、イくッ、ダメ……!、イくううう……ッー)
勇者は大王イカの望むまま、痙攣同然にビクビクと生殖器を締め付け、
イきまくり、鳴きまくった。

「うおっ、出る！」
「ひゃうッ!?」
射精は、唐突に開始された。
陸の生物とは全く違う、冷えた精液が勇者の子宮へと流し込まれてくる。
一瞬驚いたが、その冷たさも熱に浮かされた身体には、堪らない心地よさだった。
「あ……ふぅ……、お腹……冷たい……冷たいよぉ……」
うっとりと、精液の流し込まれてくる刺激と冷たさに瞳を細める。
もっと、もっと頂戴、とばかりに、
勇者は無意識に大王イカの生殖器を搾り上げた。
「おお、これは堪らん」
大王イカも、いやらしく絡み付いてくる
勇者の肉襞に、更なる射精を促される。
程なくいっぱいになった子宮から、
少し暖められた精液が膣道へと流れ出した。
ぞくぞくぞく
ひやっ
どぷっ
どぷっ
どぷっ
どぷん
ひ…ッ
ひあ…
それでも、まだ体温よりは冷たく、心地いい。
「お願い……、もっと……もっとぉ……」
勇者は、あれほど嫌悪していた魔物の精液を
自ら求めていることにも気付かず、喘ぎ、腰を揺らし続けた。

「うあ……あ……」
ハンターフライの生殖器の食い込みに、勇者は呻いた。
普段は凶器として人間に振るわれるそれが、今は勇者の性器を犯し、
子宮口の小さな口にまで達している。
ハンターフライに抱え上げられたままの行為は、
自らの体重までもが凶器となって、生殖器の食い込みを深くしていた。
ハンターフライは、ぶぶぶぶ、と羽音をさせて生殖器を振動させた。
「ふあっ、あっ、ああっ、それ、やめっ、やめ……っ」
襞という襞が、振動によって掻き鳴らされる。
先端部の差し込まれた子宮口までもが掻き鳴らされて、
勇者は身悶えしながら、反射的に膣を収縮させた。

「んっ、んんんぅっ！」
愛液をポタポタと垂らしながら締め付けてくる勇者の膣の動きに、
ハンターフライが嬉々として羽音を激しくする。
ハンターフライは初めて味わう人間のメスとの交尾のあまりの気持ちよさに、
勇者と交接したまま、興奮気味にそこら中を飛び回っているのだった。

は……あぁ……ぁ……」
振動が漸く止まり、勇者の身体が脱力する。
ひくひくと激しく上下する下腹は、勇者が達したことを示していた。
今や、勇者の口から出る制止や拒絶は、苦痛だからではなく、
感じすぎて苦しいという意味に他ならない。
酸欠気味に口をパクつかせる勇者の目の端に、男が映った。
迷ったのか、街道への近道なのか、一人の旅人がギョッとした目をして
こちらを見ている。
食い入るような男の視線に、勇者の下腹がキュッと震えた。
どれほど屈辱を受けても、人に見られることには到底慣れない。
どうか早くこの場を飛び過ぎて、と願う勇者を嘲笑うように、
ハンターフライは突然、空中静止した。
「あふ……ッ！」
ガクン、と身体が揺れて、生殖器が子宮に食い込む。
甘い苦痛混じりの快感が、一気に勇者の身体を駆け抜ける。
あ…
は…
チラ
ポタ
ポタ

もうじき陽が暮れる。
陽が暮れれば、この気持ちのいい性具を、ボストロール様に返さなくてはならない。
ハンターフライは、この場でじっくりとメスを責めることにしたのだ。
ハンターフライは再び、ぶぶぶぶ、と羽音を立てて責めを開始した。
「ひあッ！、あッ、あう、うん！」
小刻みな振動が子宮に送り込まれる。
膣道が震わされ、また再び、苦しいほどの絶頂へと導かれる。
すぐそこで、人が見てるのに――！
どれほど裸で連れ回されても、魔物に犯されて感じるという、
勇者にあるまじき恥辱に慣れることは、勇者には出来なかった。
（ダメ……！、イくのだけは……ダメ……！）
歯を食いしばり、絶頂を必死になって押さえ込む。
だが、ぶぶぶぶ、という羽音が次第に、ぶーん、という一音に変わり始める。
高振動が、勇者の性器に襲い掛かる！

「ひはあああぁぁぁぁぁぁぁッ！」
脳天を突き抜ける絶頂感に、勇者は、ぷしゃああッ、と潮交じりの尿を吹き上げた。
快感を押さえ込んだ分だけ、予想を超えた強烈な責めに耐えられなかったのだ。
ピュッ、ピュピュッ、と地面に勇者の尿と恥蜜が撒き散らされる。
勇者の膣はきゅうきゅうと痙攣気味に収縮し、
ハンターフライは嬉々として更に激しい振動を送り込んだ。
「んはッ、んはッ、んはあぁぁぁッ！」
乳首やクリトリスまでもが、じんじんと疼いて快感を訴えてくる。
勇者の痴態の全てを、男が見ている。
（ああ……見てる……、見てるうう……！）
感じながら、勇者の鋭い感覚が、男の視線の先を意識する。
大きく広げられた魔物との交接部、はしたなく潮を吹き散らしているそこを、
食い入るように見られている。
意識した瞬間、ぞくぞくぞく、と背筋が震え、勇者の膣口が無意識に締まりだす。
「あッ、いやだ……イく……、イくううううううッ！」
勇者として守るべき者に見られながら、魔物に犯され絶頂を迎える。
背徳的な快感に、勇者は陽が暮れるまで悶え続けた。

精神的な抵抗は、最早、無駄な行為だった。
自尊心を保つ為にどれほど心を強く持とうと、
身体はそれをことごとく裏切っていく。
胸を食まれ、口唇に感じ、尻穴まで嬉々として締め付ける。
「おぶ……、お……おお……お……」

（気持ちいい……、気持ちいい……、ああ、違……、気持ちいい……！）
慣らされきった今の勇者には、小さなミニデーモンの性器でさえ気持ちよかった。
むしろ、ほんの入り口しか責めて貰えないそのもどかしさが、
勇者を切なく悶えさせる。
勇者は、サマンオサの王に成り代わるべく留守をしているボストロールが
戻るまでの間、魔物達へと供された肉の玩具だった。

「おご……、お……おふぉぉ……」
勇者の膣が、主を無視して、絶頂へと至る快感を得ようと、ミニデーモンのオスを小刻みに締め付ける。
ヒクン、と下腹が揺れるたびに、魔物の精液でいっぱいになった子宮が、だぽん、だぽん、と水袋のような音を立てる。

どぷぷ

おほッ

おふおおッ

ぶるる

「おお……、お……おほ……」
もう丸三日、こんな日々を過ごしていた。
絶頂につぐ絶頂――。
地獄の責め苦ような快感に、
愚かにも街を出てしまったあの日の後悔が脳裏をよぎる。
だが、それも一瞬のこと、尻を突き上げられた瞬間、
桃色の絶頂へと塗り替えられる。
(あ、あ……、気持ちいい……お尻……気持ちいい……よぉ……!)
最早、この世界に勇者はいない、
魔物に犯されるただ一匹のメスがいるだけだった。

どくどくどぷん

程なく、サマンオサの王はすっかり変わられた、と人々の噂になった。
得体のしれない食事を作らせているとか、あれほど慈しんでいた姫を遠ざけているとか。
だが、何より人々の興味を引いたのは、王の居室に関する噂だった。

決して入ってはいけない居室の奥で、王が夜な夜な妊娠腹の少女を犯しているという、
兵士が流したとされる淫らでまことしやかな噂――。
けれど、少女が王の下に贈られたという記録はどこにもない。

では、その少女はどこの何者なのか――。
勇者の存在しない世界で、今夜も、誰も知らない少女の虚ろな喘ぎが響く。